

# 幼児の音楽的能力の発達に関する地域差

黒瀬久子・藤澤初美\*

## 1. 目的

本研究は、幼児の音楽的諸属性に関する弁別能力についての検討を、前回報告<sup>1)</sup>にひきつづき、地域を異にして在住する幼児を対象に行った。

すなわち、幼児の音楽的能力の発達とともに、地域別に特有な相違が認められるか否かについて、調査・検討することを目的としている。

あわせて、これらの結果をもとに、幼児音楽教育を一層充実させるための資料とせんとするものである。

## 2. 方法

- a) 調査時期 昭和62年6月中旬
- b) 被験者 山口短期大学附属幼稚園  
4歳：男児8名、女児6名  
5歳：男児12名、女児9名  
6歳：男児2名、女児2名  
計39名
- c) 使用テスト 音研式幼児音楽適性テスト<sup>2)</sup>

## 3. 調査内容

調査内容は前回と同様、強弱の弁別・リズムの理解・高低の弁別・音色の理解・和音の理解および鑑賞能力に関するものである。

幼児に親しみやすく、わかりやすい絵を同時に提示しながら、以下にのべる各領域について検討した。

### 3・1 強弱 (Intensity)

強弱についての能力を検討するために提示した刺激音の一例を次に示す。なお口頭による指示は、前回報告<sup>1)</sup>と同一である。

---

\* 山口短期大学児童教育学科



示は、前回報告<sup>1)</sup>と同一である。

刺激音 V



(なお、この刺激音は笛が正解である。)

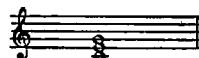
3・5 和音 (Chord)

3・5・1 単一和音

単一和音についての認知能力を検討するために提示した刺激音の一例を次に示す。なお口頭による教示は、前回報告<sup>1)</sup>と同一である。

刺激音 VI

イヌさんのバスのラッパは



ウシさんのトラックのラッパは



3・5・2 和音進行

和音進行の理解についての能力を検討するために提示した刺激音の一例を次に示す。なお口頭による教示は、前回報告<sup>1)</sup>と同一である。

刺激音 VII

リスさんのオルガンの音は



おサルさんのオルガンの音は



3・6 鑑賞 (Appreciation)

鑑賞能力を検討するために提示した刺激音の一例を次に示す。なお口頭による教示は、前回報告<sup>1)</sup>と同一である。

刺激音Ⅷ

The musical score consists of four systems of piano accompaniment. Each system has a right-hand staff (treble clef) and a left-hand staff (bass clef). The first system starts with a dynamic marking of *mf*. The second system has a dynamic marking of *mp*. The third system includes tempo markings: *rit...* followed by *tempo*. The score features various musical notations including eighth and sixteenth notes, rests, and trills (*tr*). The left hand provides a steady harmonic accompaniment with chords and moving lines.

(なお、提示した絵は、小鳥が木の枝にとまって鳴いている風景と、アヒルが水の中をにぎやかに泳いでいる風景であるが、小鳥が木の枝にとまって鳴いている風景が正解にあたる。)

#### 4. 結 果

上記の各調査項目の正解に対する配点は表1に示す通りである。これによる得点は、以下、能力点と記す。

表1. 調査項目とその配点 (能力点)

項 目	強 弱	リズム	高 低	音 色	和 音	鑑 賞	計
配 点	4	4	8	5	8	6	35

また、各調査項目に就いて、被験児の年齢または性別と、その結果との間の関係を検討するに当たっては、上記の能力点を、さらにそれぞれ、100点満点に換算した値 (以下これを単に得点と記す) を用いた。

上記の調査項目の年齢および、その性別と各平均得点を表2に示した。なお、今回の調査では、6歳児がわずかに4名で、他の年齢児数との差が大きいが、一応、調査対象として同様に処理した。

表2. 音楽能力調査の年齢・性別得点平均値

年 齢		項 目	強 弱	リズム	高 低	音 色	和 音	鑑 賞	平 均
4 歳	男		56.3	37.5	59.4	65.0	62.5	92.2	61.4
	女		75.0	50.0	39.5	56.6	41.6	63.8	51.9
	計		64.3	42.8	50.9	61.4	53.5	72.5	57.3
5 歳	男		80.0	67.5	46.9	60.0	56.3	72.2	60.9
	女		85.0	67.5	41.6	84.0	76.3	74.0	69.2
	計		82.0	66.5	44.6	70.4	64.9	73.0	64.5
6 歳	男		75.0	100.0	43.8	90.0	68.8	75.0	71.4
	女		75.0	50.0	37.5	50.0	56.3	66.7	54.3
	計		75.0	75.0	40.0	70.0	62.5	70.0	62.9
全体平均			75.0	58.9	46.3	68.0	60.0	73.3	61.7

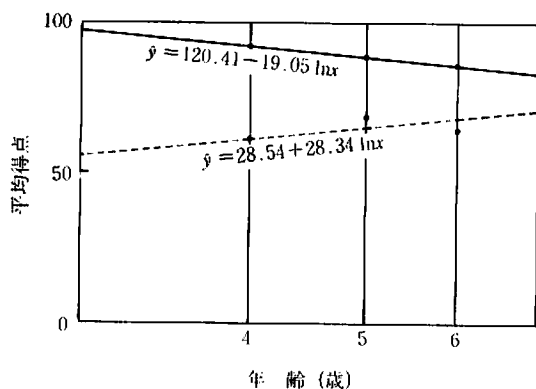


図1. 強弱に関する平均得点と年齢との関係

$x$  : 年 齢                      — : 前回調査結果  
 $y$  : 平均得点                  - - - : 今回調査結果

被験児の年齢と、音の強弱に関する平均得点との関係を、前回の調査結果とともに、図1に示した。

強弱の弁別能力についての得点は、4歳児においては64.3、5歳児においては82.0、6歳児のそれは75.0となり、結果としては5歳児がもっとも高い得点を得た。

前回の報告においては、年齢の増加とともに得点が減少していたが、今回の調査による本項目の結果は、反対に

年齢の増加とともに弁別能力は上昇傾向が認められた。

そこで、前回と今回の両結果を比較するために、 $\chi^2$ -検定を行った。両者の間の関係は、 $\chi_0^2 = 2.26 < \chi^2(2, 0.05) = 5.99$ で、有意差は認められない。

なお、年齢 ( $x$ ) と平均得点 ( $y$ ) との間は、対数回帰式で示されるが、その相関性は低い ( $r^2 = 0.65$ )。

被験児の年齢と、リズムに関する平均得点との関係を、前回の調査結果と共に図2に示した。

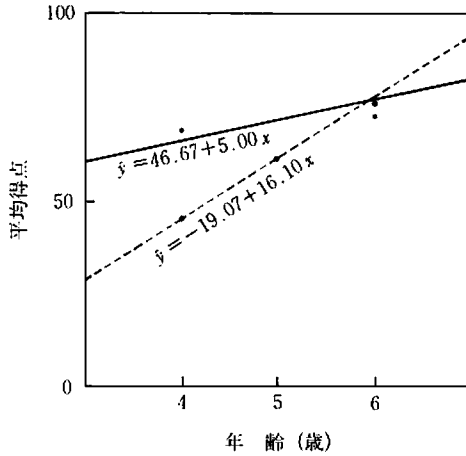


図2. リズムに関する平均得点と年齢との関係  
— : 前回調査結果, ..... : 今回調査結果

リズムの理解についての得点の平均は4歳児においては42.8であり、5歳児においては66.5、6歳児のそれは75.0となり、結果として6歳児がもっとも高い得点を得た。

図2から明らかなように、前回と比較して今回の結果は年齢とともに上昇傾向が強くと、また、 $\chi^2$ -検定の結果 [ $\chi_0^2 = 6.62 > \chi^2(2, 0.05) = 5.99$ ]、有意の地域差が認められた。また、年齢と得点との間是一次式としての関係で表される ( $r^2 = 0.96$ )。

被験児の年齢と、音の高低に関する平均得点との関係を、前回の調査結果とともに、図3に示した。

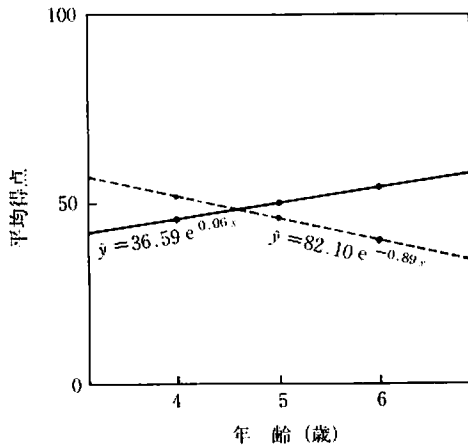


図3. 音の高低に関する平均得点と年齢との関係  
— : 前回調査結果, ..... : 今回調査結果

音の高低の弁別能力についての平均得点は4歳児において50.9、5歳児においては44.6、6歳児のそれは40.0となり、結果としては4歳児がもっとも高い得点を得た。

図3から明らかなように、今回は、前回の結果とは逆に、年齢の増加とともに平均得点が低下する傾向が認められる。しかし、前回と今回の調査結果の間には、有意差は認められない ( $\chi_0^2 = 1.62 < \chi^2(2, 0.05) = 5.99$ )。

また、図3には年齢と平均得点の間は指数回帰式で示したが、両者間の相関は低い ( $r^2 = -0.99$ )。

被験児の年齢と音色に関する平均得点との関係を、前回の調査結果とともに、図4に示した。すなわち、音色の理解についての平均得点は、4歳児においては61.4であり、5歳児におい

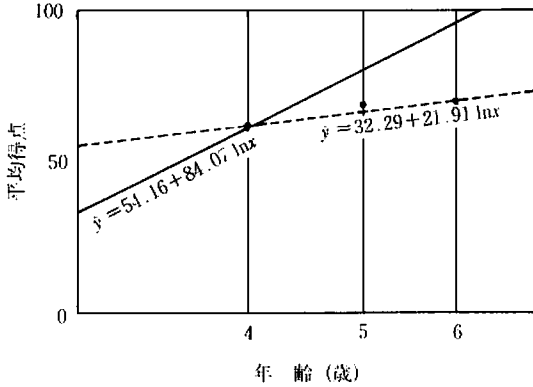


図4. 音色に関する平均得点と年齢との関係  
 ——：前回調査結果，-----：今回調査結果

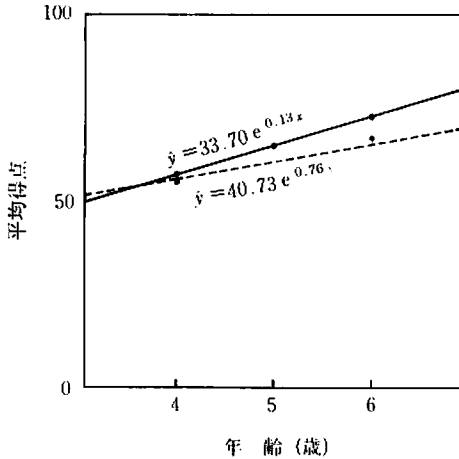


図5. 和音に関する平均得点と年齢との関係  
 ——：前回調査結果，-----：今回調査結果

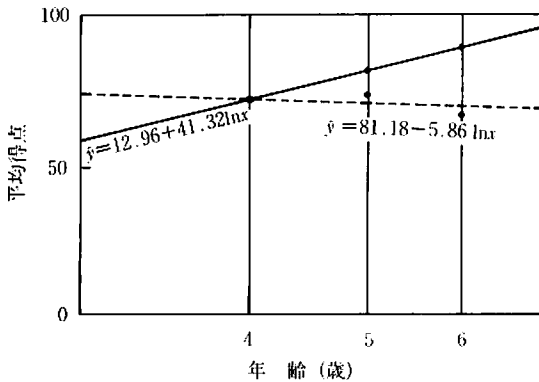


図6. 音楽鑑賞に関する平均得点と年齢との関係  
 ——：前回調査結果，-----：今回調査結果

ては70.4、6歳児のそれは70.0となり、結果として5歳児がもっとも高い得点を得た。

図4から明らかなように、音色に關しての平均得点は、わずかではあるが年齢の増加とともに、上昇の傾向が認められた。また、前回と今回の調査の結果の間には、有意差は認められない [ $\chi_0^2=1.68 < \chi^2(2,0.05)=5.99$ ]。

被験児の年齢と和音に關する平均得点との関係を、前回の調査結果とともに、図5に示した。

すなわち、和音の理解についての平均得点は、4歳児において53.5であり、5歳児においては64.9、6歳児のそれは62.5となり、結果として5歳児がもっとも高い得点を得ている。

図5から明らかなように、前回および今回とも年齢の増加とともに、和音に対する理解能力は上昇傾向が認められた。また、前回と今回との調査結果の間には、有意の差が認められた [ $\chi_0^2=11.54 > \chi^2(2,0.05)=9.21$ ]。

被験児の年齢と鑑賞に關する平均得点との関係を、前回調査結果とともに、図6に示した。

すなわち、鑑賞能力についての平均得点は、4歳児においては72.5であり、5歳児においては73.0、6歳児のそれは70.0となり、結果として5歳児がもっとも高い得点を得た。

図6から明らかなように、今回の調査では、前回の結果とは逆に鑑賞能力

は年齢とともに、下降の傾向が認められた。しかし、前回と今回との調査結果の間には、有意の差は認められない [ $\chi_0^2=1.32 < \chi^2(2,0.05)=5.99$ ]。

上記の6項目に関する得点合計を6で除した値を総合得点として、各年齢とその平均値との関係を図7に示した。

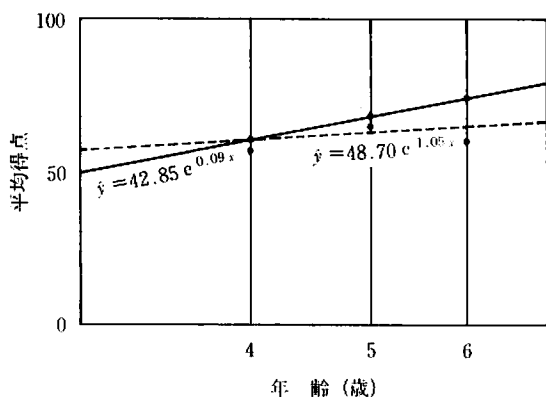


図7. 年齢別平均総合得点  
——: 前回調査結果, - - - - : 今回調査結果

すなわち、今回の調査では、各年齢の平均総合得点は、4歳児が57.3、5歳児64.5、および6歳児62.9であった。

図から明らかのように、平均総合得点は、わずかではあるが、年齢が進むにつれて上昇の傾向が認められる。

前回の場合と比較検討した結果、有意差は認められない [ $\chi_0^2=0.24 < \chi^2(2,0.05)=5.99$ ]。

以上の調査結果により、幼児の音楽能力を総合的に判断するために、能力

点(表1)の合計を、年齢と誕生月別に7段階に分けて考察することを試みた。その換算表を表3に示した。

表3. 音楽能力点を音楽能力段階に換算する表

年 齢		能力段階						
		1	2	3	4	5	6	7
4 歳	0月～5月	0～5	6～9	10～14	15～20	21～24	25～28	29～35
	6月～11月	0～7	8～11	12～16	17～21	22～25	26～29	30～35
5 歳	0月～5月	0～9	10～13	14～18	19～23	24～26	27～30	31～35
	6月～11月	0～11	12～16	17～20	21～25	26～28	29～32	33～35
6 歳	0月～5月	0～13	14～18	19～22	23～27	28～30	31～33	34～35
	6月～11月	0～15	16～20	21～24	25～28	29～31	32～34	34～35
7 歳	0月～5月	0～17	18～21	22～25	26～29	30～32	33～34	35
	6月～11月	0～18	19～23	24～27	28～30	31～32	33～34	35

今回の調査結果を、表3により換算して、各段階に該当する人数を求めた計は、表4に示した。

表4. 年齢別音楽能力段階人数

年 齢	1	2	3	4	5	6	7	計(人)
4	0	1	2	6	2	3	0	14
5	0	0	3	12	4	1	1	21
6	0	1	1	2	0	0	0	4
計(人)	0	2	6	20	6	4	1	39



すなわち、各年齢とも第4段階が最も多く、全人数の51.3%に相当し、全被験児による平均音楽能力段階は4.2であった。4歳児と5歳児の平均段階は、それぞれ、ともに4.3で年齢差はなかった。7段階には5歳児の1名のみが該当し、全被験児の2.6%に相当する。

音楽能力点を得点に換算した値の年齢および性別の平均値を表5に示した。

表5. 年齢・性別音楽能力平均得点

性別 \ 年齢	4	5	6
男	65.7	55.7	57.1
女	54.3	68.6	35.7
男・女	61.4	61.4	47.1

また、年齢と平均能力得点との関係は、前回の結果とともに図8に示した。

すなわち、性別または年齢と音楽能力得点とは、直接の相関があるとは考えられない。ただ、今回の被験児の中では5歳女兒のグループの能力得点が最も高かった。また、前回と今回の調査結果の

間には有意の差は認められなかった [ $\chi^2_0 = 0.83 < \chi^2(2, 0.05) = 5.99$ ]。

以上、図1～8から明らかなように、6項目の調査のうち、高低の弁別・鑑賞能力を除く4項目については音楽的属性の弁別能力は発達しているといえる。しかし、4歳から6歳にかけて、前回の結果と比較してみると、音楽的属性の弁別能力が急速に発達するもの（前回は音色・鑑賞・和音、今回はリズム・強弱）、あまり急速な発達をしないもの（前回はリズム・高低、今回は音色・和音）、下降が認められたもの（前回は強弱、今回は高低・鑑賞）がある。

つぎに、調査内容の各項目を年齢および性別との関係でF-検定を行った。結果は表6に示す通りである。

表6. 分散分析表

変動因	平方和	自由度	不偏分散	F
項目 (P)	2193.67	5	438.73	3.74*
性別 (Q)	6.1	1	6.1	0.05
年齢 (R)	650.00	1	650.00	5.54*
P × Q	439.37	5	87.87	0.75
P × R	556.09	5	111.21	0.95
Q × R	205.39	1	205.39	1.75
P × Q × R	587.09	5	117.41	
計	4637.71	23		

\*: 水準0.05で有意差が認められる。

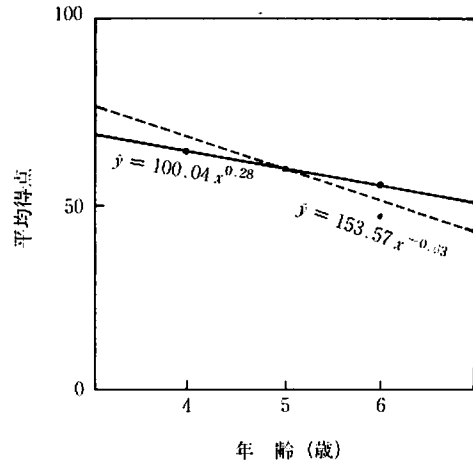


図8. 音楽能力平均得点と年齢との関係  
—: 前回調査結果, - - -: 今回調査結果

項目（P）については有意差は認められる（有意水準0.05）。

性別（Q）については有意差は認められなかった。年齢（R）については有意差は認められる（有意水準0.05）。

調査項目と性別の二重交互作用項については有意差は認められなかった。調査項目と年齢の二重交互作用項についても有意差は認められなかった。これらの調査項目に対する結果は前回とまったく同一であった。また性別と年齢の二重交互作用項については前回は有意差が認められたが、今回は有意差が認められなかった。

## 5. 考察および展望

今回の調査結果の得点（平均）は、4歳から5歳・6歳と年齢が増加するとともに高くなっているのはリズムの理解のみである。その他の5項目については年齢とともに得点（平均）が高くなっていることは認められない。

逆に高低の理解のみが年齢の増加とともに低くなっている。また鑑賞能力については6歳がもっとも低い得点となっている。

男女別にみると、4歳児では強弱の弁別、リズムの理解は女兒の得点が高く、その他の4項目はすべて男児が高い得点である。5歳児においては、高低の理解のみ女兒が低い得点であり、リズムの理解は同一得点である。その他の4項目は女兒が高い得点を得た。

6歳児は少人数であったが、強弱の弁別が同じ得点であり、その他の5項目においては、すべて男児が高い得点を得た。

これらを前回の調査結果と比較してみると、高低の理解については前回わずかではあるが、年齢の増加とともに得点は高くなっていた。

また、5歳児においてもすべての調査項目において女兒が高い得点であった。

全体平均も前回は年齢とともに得点は高くなっていたが、今回は4歳・5歳と得点は増加したものの、6歳児は低い得点であった。

また、能力段階については、男女児別には5歳の女兒がもっとも高得点を得、4歳・6歳は男児が高い得点で、平均してみると4歳・5歳は変化がなく、6歳がもっとも低い結果であった。能力段階の得点が下降していることについては発達との関係で妥当性があるかどうか、疑問点である。また社会的背景等いろいろ考えられるが将来の研究にまきたい。

以上これらの結果から明らかなように、全体としては急速な伸びは認められないことを示すかもしれない。今回の調査地域が、静かな農村地帯で、昭和30年代に村から市に合併され、最近徐々に開発が進められているという環境のなかで育った子どもたちを対象にした。また、このような調査は子どもたちにとって、はじめてのことであった。

前回、今回の調査を通して、ことばの理解が困難であったために得点が低くなったとも考え

られるもの、また音そのものが、子どもたちにとって判断しがたいものがあるのではないかと  
思われるものなどが考えられる。

また一方、生活環境の変化とともに、音楽的環境も変化し、集中力を必要とする作業には苦  
痛であったと考えられる。

6項目の調査内容のうち、リズムの理解・和音の理解において、地域差が認められ、その他  
の項目において地域差が認められず、音楽能力においても地域差が認められなかった。これは  
音楽的能力の発達の伸長が期待しがたいことを物語っているかもしれない。が、しかし、これ  
ら環境変化に振り回されることなく、子どもの発達段階をふまえ、適時性を考慮しながら、  
子どもたちを保育することによって、子どもたちの音楽的能力は豊かに育ち、より高くなると  
考えられる。

〔文 献〕

- 1) 黒瀬久子：下関女子短期大学紀要、6、49-62 (1987)
- 2) 真篠 将・浜野政雄・茂木茂八編著（音楽心理研究所）：音研式 幼児音楽適性診断テスト、日本文化科  
学社 (1972)